

5-4			
主題	ボランティア・実習生への年代別アプローチとねらいに基づいた活動の実践とその成果について		
副題	充実したボランティア活動・実習が行えるために		
キーワード1	ボランティア	キーワード2	なし
		研究(実践)期間	24 ヶ月
法人名	社会福祉法人 青芳会		
事業所名	特別養護老人ホーム 今井苑		
発表者(職種)	西村拓(介護職員)、馬場由美子(介護職員)		
共同研究(実践)者	河原田理世(介護職員)、関塚真美(介護職員)、木村和代(介護職員)		
電話	0428-31-3800	FAX	0428-31-3871
今回発表の事業所やサービスの紹介	青梅市にある特別養護老人ホームで昭和 63 年 8 月に開設しました。地域との繋がりを大切にし、今井地区の中の施設、今井苑として親しまれています。近隣の保育園の園児や中学校の学生ボランティアも訪れる事もあり職員と利用者が家族のような温かい雰囲気の中で生活をして頂いています。		

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設では以前より中学生、高校生、大学生のボランティア・職場体験・介護福祉士実習・介護等体験(以下「活動」という)などの受け入れを行っていた。

生活相談員によるボランティアや実習受け入れ窓口は整備されていたが、受け入れを行う現場担当者や活動の内容が明確になっておらず、受け入れ後に課題があった。

そこで、担当者と活動日程を記したボランティア計画または実習計画を事前に作成し、受け入れを行った。

また、受け入れを行っている中で各年代(中学生・高校生・大学生など)によって伝え方や各活動のねらいの設定方法が異なるのではないか、ボランティアや実習生の充実度に繋がらないのではという事が課題となった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

〈目的〉

- ・ボランティア・実習受け入れ体制の整備(窓口と現場との情報共有)
- ・職員のボランティア・実習生との交流を深める。
- ・充実した活動の提供・支援

本研究を行う事で以下の成果を期待する。

①ボランティア、実習を受け入れにあたって事前に活動日程と担当者を明確にし、ボランティア計画を作成・周知する事で受け入れを行う現場が「いつ、誰が、何を担当する」のかが分かるようになり、担当者とボランティア・実習生との交流が以前より深まる。

②各年代に合わせたアプローチ方法やねらいの設定を明確にすることでボランティア・実習生が充実した活動が行えることを期待する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

本研究は①ボランティア・実習受け入れ体制の整備への取り組み②充実した活動を提供するためにアプローチ方法やねらいの設定し活動を実践する取り組みに分け段階的に取り組みを行った。

①ボランティア・実習受け入れ体制の整備

対象者：受け入れ担当職員

実施期間：平成 26 年 7 月～平成 27 年 3 月

取り組み内容

- ・事前に活動日程と担当者を記したボランティア計画を作成し、各フロアへ発信する。
- ・作成されたボランティア計画に基づき、活動の提供・支援を行う。

②充実した活動の提供と実践

対象者：受け入れ担当職員

実施期間：平成 27 年 4 月～平成 28 年 6 月

取り組み内容

各年代別「ねらい」一覧表の作成を行い、以下の取り組みを行った。

- ・御利用者とのコミュニケーションへのアプローチ方法の提供・支援
- ・トロミ剤の試飲や車椅子乗車などの利用者体験
- ・活動を通して日毎に具体的目標を持ってもらうよう何をいつまでに行うのかを伝え行ってもらう「ミッション」の設定。
- ・振り返りの導入
- ・学生ボランティアへのアンケートの実施

《4. 取り組みの結果》

「①ボランティア・実習受け入れ体制の整備」についての取り組みを行った結果、事前に担当者や活動日程の把握ができ、「いつ」「誰が」「どの内容に関わるのか」が分かり、ボランティア・実習生との関わりがより持てるものとなった。取り組みを行っている中で各年代によって伝え方が異なるのではないかとこの意見が挙がった。

その意見を踏まえた「②充実した活動の提供と実践」についての取り組みの結果として

- ・各年代によって伝え方を変える事で職員とボランティアがより関わりを持つ事ができた。

- ・ねらいを設定したことで御利用者とボランティアとの関わりを持つきっかけ作りができた。

- ・活動を終えたボランティアなどの感想より充実度の高い活動を提供することができた。

また、本研究での取り組み結果を参考に外国人介護士教育や人材育成に活かしている。

《5. 考察、まとめ》

今回の取り組みによりボランティア・実習の充実度が高めることができたが、ボランティアのリピートへ直接繋がるものとは言えなかった。今後は「またボランティアがしたい」と思えるようさらなる内容の見直しや改善が必要と考える。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「社会福祉施設のためのボランティア・コーディネーションガイドブック」（2014 年）
東京ボランティア・市民活動センター

《8. 提案と発信》

社会福祉法人の責務でもある地域公益活動においてボランティア受け入れは必要不可欠のものであり施設と地域の架け橋となっていく行かなければならない。また、ボランティア受け入れを行うことで、施設での仕事を知ってもらうきっかけともなるのではないかと。そのためにも施設職員一人ひとりが施設の魅力を発信していかなければならない。